

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第 28 回 どんな年になるのか令和 5 年

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

明けましておめでとうございます。2023 年、日本の暦^{こよみ}では令和 5 年が明けました。ウクライナではロシア軍の侵攻が続き、新型コロナウイルス感染症の封じ込め政策を撤廃した中国は台湾統一、日本の尖閣諸島（沖縄県石垣市）奪取などの準備を着々と進めています。1 月 8 日に 39 歳の誕生日を迎えたとみられている金正恩^{キムジョンウン}朝鮮労働党総書記が統率する北朝鮮は元日（1 月 1 日）未明から日本海に向けてミサイルを発射し、一方で 7 回目の核実験の準備をほぼ終わるなど、日本周辺をはじめとする世界各地ではきな臭い年明けとなっています。

そんな中で 8 日午後、国内では、「成人式」が行われ着飾った若者たちが大人の仲間入りをしたところがありました。「成人の日」の祝日は「1 月第 2 月曜日」と決められており、今年は 9 日ですが、1 日早く、前日の日曜日の午後に式典を行う市町村が多くなっているそうです。土曜日を含めた三連休^{なつかび}の中にお祝いをするので、ゆったりとした時間を過ごし、心から成人をお祝いしようということでしょう。午後からの開催とはいえ、例えば佐賀市の美容院や写真館では、午前 7 時 23 分の同市の日の出より 2 時間半も早い 5 時頃から、髪型や装いを整えたり、記念写真を撮ったりする若者がひきもきらなかつたそうです。

「成人式」と「」付で書いたのには、訳^{わけ}があります。わが国では、今年から成人年齢が 18 歳に引き下げられましたが、18 歳の青年たちを招いて成人式を行ったのは全国で 3 自治体だけです。多くは従来通り 20 歳の人たちが対象で、今年の名前は「20 歳を祝う集い」などとして開催していました。「18 歳は入学試験や就職活動に重なり、ゆっくり成人を祝う雰囲気ではない」などという理由によるようです。法律と国民生活のミスマッチが行政に現れたわけで、今後、「成人の日」「成人式」の在り方、ひいては「成人」そのものの位置づけが問われることになりそうです。

正月^{はつもうで}と言えば初詣。全国の神社やお寺には、年明けからたくさんの善男善女^{ぜんなんぜんによ}が訪れ、今年 1 年の無事と繁栄を祈りました。NHK の年越し番組「行く年くる年」で中継された神奈川県鎌倉市の鶴岡八幡宮^{つるがおかほちまんぐう}では、1 日午前 0 時を過ぎると、境内^{けいだい}に詰め掛けていたたくさんの人たちが本殿参拝を目指し、押し合いへし合いの大混雑でした。

スポーツにも観客が詰めかけ、2 日から 3 日にかけて行われた東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）では 2 日間、計 200 キロを超える沿道のあちこちに分厚い応援の人垣ができました。東京・新宿区の国立競技場で 8 日に行われたラグビー大学手権大会決勝戦では帝京大学と早稲田

大学のファンがスタンドを埋め尽くしました。同じ日に墨田区の両国国技館で初日を迎えた大相撲初場所は、通常定員の約91%にあたる9,700人ほどの観客を迎え、「満員御礼」の垂れ幕が下がり、昨年まで禁止されていた声を出しての応援もマスク着用などの条件付きで解禁されました。

筆者は7日、東京・西東京市のダイードリンコアイスアリーナで行われたアイスホッケーの早稲田大学と慶應義塾大学による早慶戦^{そうけいせん}を観戦しましたが、ここでもスタンドは超満員で、両校応援団が張り裂けんばかりの歓声を上げ、大きな盛り上がりを見せていました。

コロナ禍の中で迎えた3回目の正月は、インフルエンザの同時流行もありますが、ワクチンやマスクをはじめとした感染対策を十分に施したうえで通常の生活が戻ってきたといえるでしょう。

通常通りと言え、都内の銀座や六本木などを歩いていると、英語をはじめとした外国語が聞こえてくる機会が急に増えてきました。3年前までの「観光立国ニッポン」が再現されようとしています。

今年の干支は、「癸卯^{みづのと}」です。干支は「かんし」と読む場合もありますが、中国で生まれた暦を数える用語です。アジアの漢字文化圏で、年月日のほか、時間、方位、角度などを表す方法として使われています。昨年もご紹介しましたが、甲^{こう}、乙^{おつ}、丙^{へい}、丁^{てい}、戊^ぼ、己^き、庚^{こう}、辛^{しん}、壬^{じん}、癸^きの十干と、子^ね、丑^{うし}、寅^{とら}、卯^う、辰^{たつ}、巳^み、午^{うま}、未^{ひつじ}、申^{さる}、酉^{とり}、戌^{いぬ}、亥^いの十二支を組み合わせ、「甲子^{きのえね}」、「乙丑^{きのとうし}」、「丙寅^{ひのえとら}」から「癸亥^{みづのと}」まで60通りの干支があります。10×12で120通りの干支があってもいいような気もしますが、最小公倍数の60通りで一回りとなっています。ですから、「乙子」などの組み合わせは存在しません。そして60年経つと暦が一回りするのです。60歳になる年を「還暦」と言います。

その中で、癸卯はどんな年なのでしょうか。

インターネットの『水晶玉子 エレメンタル占星術』で調べると、「癸」は、生命の終わり、そして新たな命が始まる「春の手前」を意味するそうです。そして、「卯」はウサギ。ウサギが跳ねるように、大きなステップを踏み出したり、草木の芽吹く様子を表したりするそうです。つまり、「これまでの生活が一区切りし、春が訪れ、草木が成長するように勢いよく飛躍していく年」だそうです。また、「卯」という字は「扉が開く様子を表している」とも言われています。確かに、両開きの扉のように見えますね。

これを筆者なりに解釈すると、これまで3年間社会を閉塞していた新型コロナウイルスから解放され、未来に向かって扉が開くのではないかと思います。そして、それを心から期待せずにはられません。

そうしたことから日本社会を振り返ってみましょう。昨年は、国際的には2月24日のロシア軍

によるウクライナ侵攻で世界が一変したのは誰もが認めるところです。それ以来、わが国の安全保障環境が激変し、攻撃してくる国の軍事施設を叩く「反撃能力（敵基地攻撃能力）」の保有を明記した安全保障3文書を閣議決定して防衛政策を転換しました。また、防衛費は国民総生産（GNP）比2%を目指して増額することになりました。1945年の敗戦後では初めて、自国の領土や自国民を自分で守る「普通の国」に向かって一步を踏み出したともいえるでしょう。

安倍晋三元首相が参議院通常選挙運動期間中の昨年7月8日に銃撃されて亡くなって以来、政局もガラッと変わりました。翌々日10日の参議院選挙の投票結果では安倍氏逝去への同情票もあり、自民党は大勝しましたが、その後の岸田文雄内閣は、自民党と世界平和統一家庭連合（旧統一教会）との癒着疑惑などで支持率を一気に落とし、厳しい政権運営を迫られています。

ウクライナ情勢を受けて、エネルギーをはじめとする物価の高騰もあり、国民の財布も寂しくなっています。留学生の皆さんの生活も厳しさを増しているのではないのでしょうか。

こうした閉塞状況を一気に明るくするのが癸卯であってほしいと思います。

今年春には、全国の都道府県知事、議員、市町村長、議員の多くを選ぶ統一地方選挙が行われます。また、それと合わせていくつかの国会議員の補欠選挙なども予定されています。これらの結果が、これからの社会の明暗を左右するでしょう。また、スポーツでは3月には野球のワールド・ベースボール・クラシック（WBC）が開催され、秋にはラグビーのワールドカップも予定されています。こうした国際大会で、昨年のサッカー・ワールドカップのように、日本チームが活躍すると国民感情も明るく前向きになって来るでしょう。

そんなことを期待しながら、3年間のコロナ禍を吹き飛ばし、新型コロナウイルスと共存して明るい未来を築く年にしたいと思います。